

平成18年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 －

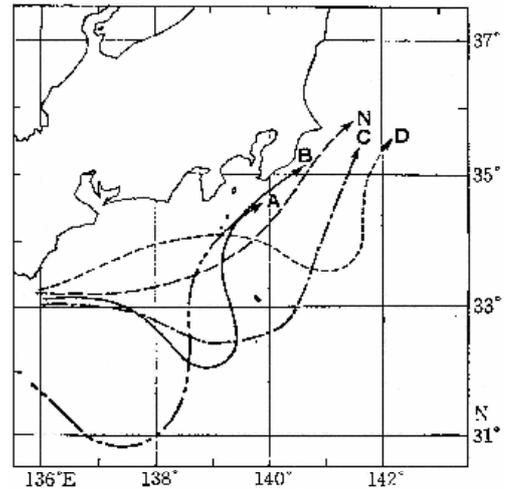
今後の見通し(2006年8月～12月)

海況

日本南岸の黒潮は、9月までN型流路で推移し、10月以降にA型流路へ移行する可能性がある。

沿岸水温は、潮岬以西が「平年並み」～「高め」で小蛇行通過時に「低め」、潮岬～犬吠埼が「平年並み」～「低め」で暖水波及時に「高め」、伊豆諸島南部海域が「平年並み」～「高め」、犬吠埼以北が「平年並み」～「やや低め」で暖水波及時に「高め」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、
やや低め＝平年値-1.0℃程度、低め＝平年値-1.5℃程度



黒潮流型の分類図

川合英夫(1972): 海洋物理Ⅱ、東海大学出版会

漁況(来遊量予測)

マサバ・ゴマサバ太平洋系群

1歳魚は好調であった前年を下回る。

2歳魚は前年を上回る。

サバ類全体としては前年を下回る海域が多いが、
紀伊水道外域、薩南海域は前年並みから上回る。

マアジ太平洋系群

低調に推移する海域が多い。

マイワシ太平洋系群

依然として低水準であるが、房総～常磐の1歳魚は低調であった前年を上回る。

カタクチイワシ太平洋系群

0歳魚は前年を下回るが、1歳魚が主体で総じて前年を上回る。

ウルメイワシ太平洋系群

前年を下回る海域が多い。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、笠原、田中(博)、佐藤

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線7375、7376)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759

電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp

独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所 業務推進部

〒236-8648 横浜市金沢区福浦2-12-4

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001、電子メール：nrifs-kiren@ml.affrc.go.jp

本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査推進委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び中央水産研究所のホームページ(<http://www.nrifs.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	徳島県立農林水産総合技術支援センター 試験研究部 水産研究所
青森県水産総合研究センター	高知県水産試験場
岩手県水産技術センター	愛媛県中予水産試験場
宮城県水産研究開発センター	愛媛県水産試験場
福島県水産試験場	大分県農林水産研究センター 水産試験場
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	大阪府立水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所	香川県水産試験場
神奈川県水産技術センター	北部太平洋まき網漁業協同組合連合
神奈川県水産技術センター 相模湾試験場	社団法人 日本定置漁業協会
静岡県水産試験場	社団法人 いわし食用化協会
静岡県水産試験場 伊豆分場	社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	気象庁 地球環境・海洋部 海洋気象情報室
三重県科学技術振興センター 水産研究部	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
三重県科学技術振興センター 水産研究部 鈴鹿水産研究室	独立行政法人 水産総合研究センター 本部 東北区水産研究所 中央水産研究所
和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場	

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2006年8月～12月）

（1）黒潮

◎潮岬以西の黒潮

- ・九州南方海域の黒潮北縁は、離接岸を繰り返しながら、期前半は屋久島南付近から離岸傾向、期後半は屋久島南付近から接岸傾向で推移する。
- ・7月中旬現在九州東方沖に存在する規模の大きい小蛇行が8月～9月四国沖を東進する。
- ・都井岬沖の離岸傾向は9月まで継続する。
- ・室戸岬沖では8月以降、潮岬沖では9月以降、期間を通して離岸傾向となる。

◎潮岬以東の黒潮

- ・9月までN型流路で推移する。10月以降にA型流路へ移行する。
- ・野島崎沖の黒潮流軸は、期間を通して接岸傾向で推移する。

（2）薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、黒潮小蛇行の東進に伴って沿岸域へ一時的に暖水が波及することがある。
- ・潮岬以東では、N型流路時黒潮の離接岸変動に伴って沿岸域へ一時的に暖水が波及することがある。A型流路時熊野灘～遠州灘は内側反流に伴い沿岸域へ暖水が進入し、伊豆諸島海域は断続的に暖水波及が起こる。

（3）鹿島灘～常磐南部海域

- ・房総沖の黒潮の離接岸変動に伴って黒潮系暖水が沖合から一時的に波及することがある。

（4）沿岸水温

- ・潮岬以西は「平年並み」～「高め」で小蛇行通過時は「低め」、潮岬～犬吠埼は「平年並み」～「低め」で暖水波及時に「高め」、伊豆諸島南部海域は「平年並み」～「高め」、犬吠埼以北は「平年並み」～「やや低め」で暖水波及時に「高め」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、高め＝平年値＋1.5℃程度、
やや低め＝平年値－1.0℃程度、低め＝平年値－1.5℃程度

経過（2006年4月～6月）（注：経過は図1を参照のこと。）

（1）黒潮

- ・4月上旬、一時的に伊豆諸島域で蛇行するC型→D型流路となった。
- ・4月中旬～下旬、小規模な変動を伴ったN型流路であった。
- ・5月～6月、安定したN型流路で推移した。
- ・5月下旬に九州南東沖に黒潮小蛇行が形成され、6月に蛇行規模が拡大し、6月下旬には蛇行東端が土佐湾沖に達した。

（2）薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・4月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。
- ・5月～6月、黒潮北縁は離岸傾向で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 4月上旬～中旬、九州東方沖にあった小蛇行が小規模な冷水渦に分裂しながら四国沖を東進した。
- ・ 4月下旬～5月、都井岬沖～潮岬沖では黒潮が接岸傾向となった。
- ・ 5月以降潮岬に黒潮が接岸し、紀伊水道外域では和歌山県側からの暖水波及が継続した。

◎潮岬以東

- ・ 1月以降引き続き、今期間を通して、伊豆諸島北部海域は低温傾向が著しかった。
- ・ 4月初め、伊豆諸島海域の全域が一時的に冷水域に入った。
- ・ 4月、熊野灘では上旬に御前崎沖の黒潮北縁から暖水流入、中旬以降は黒潮内側反流の流入によって、表層では一時的に平年並み～やや高めとなったが、下層では低水温傾向が持続し、一部では記録的な低水温であった。
- ・ 野島崎南東沖の黒潮は、4月上旬に150マイル以上離岸していたが、4月下旬60マイル付近まで接岸した。
- ・ 4月下旬～5月上旬、伊豆諸島北部海域で顕著な接岸変動が見られ、沿岸に強勢な暖水が波及し、駿河湾では平年並み～やや高めの水温となった。
- ・ 5月下旬、太東岬沖の黒潮は34°20' N付近を東へ流れ、流路の位置が南偏傾向となった。
- ・ 5月～6月、熊野灘に顕著な暖水流入は見られず、表層を含めて低水温傾向で、一部では記録的な低水温となった。
- ・ 6月下旬以降、伊豆諸島北部海域は顕著な冷水域に入り、きわめて低温となった。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 4月、黒潮は南偏傾向を示し、犬吠埼沖から北東の方向へ流れ、期間後半には沖合から鹿島灘沿岸に暖水を波及させた。黒潮系暖水は38° N付近以南の海域を広く覆った。親潮水は38°30' N付近まで南下し、派生した親潮系冷水が常磐南部の沿岸を南下した。
- ・ 5月、黒潮は依然として南偏傾向を持続し、ほぼ東の方向へ流れ、常磐南部や鹿島灘に南の方向から沿岸域に小規模かつ断続的に暖水を波及させた。
- ・ 6月、黒潮は南偏傾向を持続し、ほぼ東の方向へ流れ、南東の方向からは常磐南部沿岸に小規模かつ断続的に暖水が波及し、本海域を広く覆った。

現況(2006年7月19日現在)

(1) 黒潮

- ・ 黒潮はN型流路で推移している。
- ・ 九州東方沖に比較的規模の大きい小蛇行が存在している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は中之島の北に位置している。

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は都井岬沖～足摺岬沖で著しく離岸していて、室戸岬沖～潮岬沖で接岸している。

◎潮岬以東

- ・ 黒潮は熊野灘沖～遠州灘沖の33° N付近を東へ向かい、八丈島の北を通過後北東へ流れ、34°30' N付近から東へ流去している。

- ・伊豆諸島北部海域は顕著な冷水域に入っている。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・沖合に黒潮系暖水が分布している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に従った。

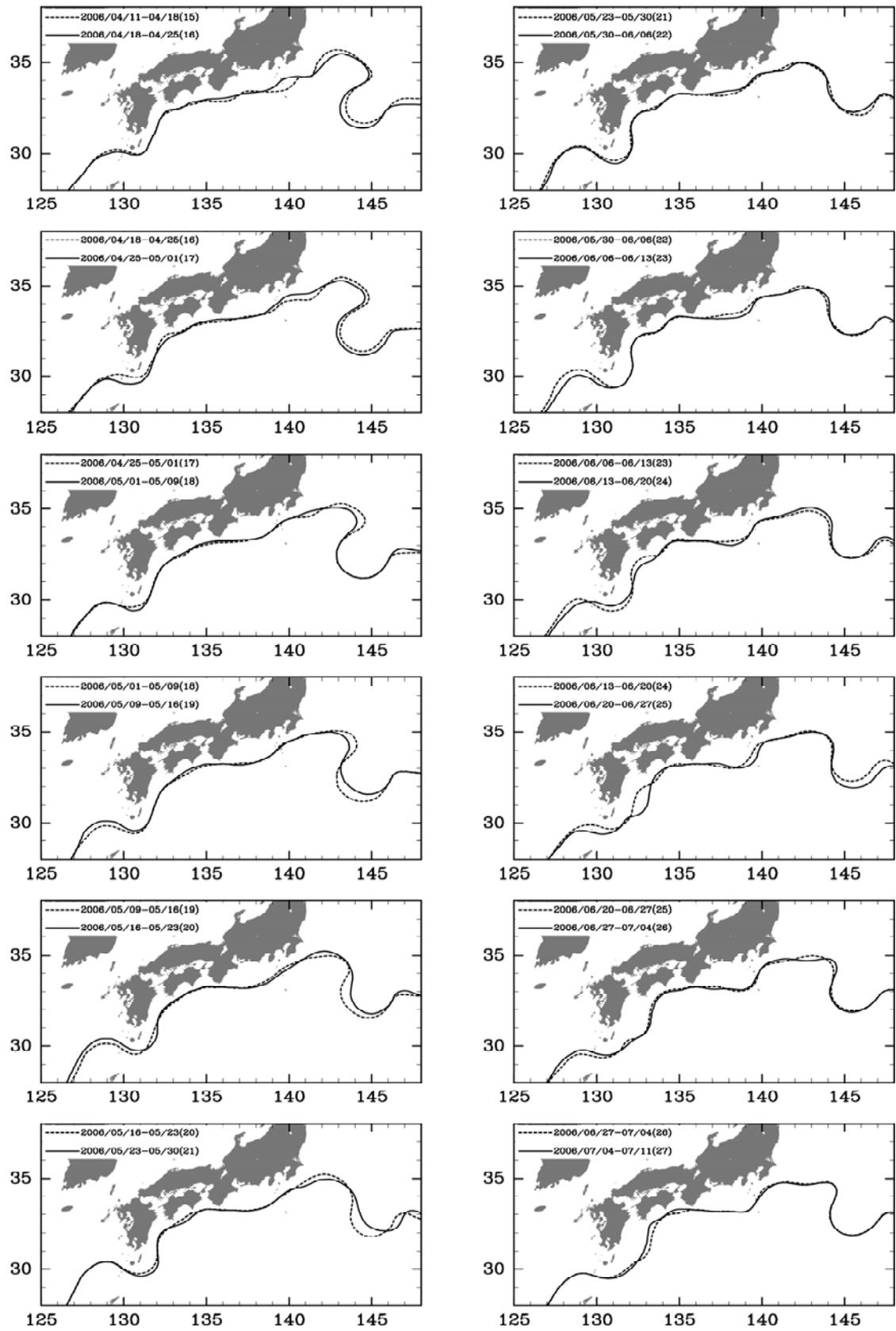


図1 黒潮流軸のパターン
(2006年4月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2006(平成18)年8月~12月)

対象海域：薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受け網、たもすくい

対象魚群：0歳魚(2006(平成18)年級群)、1歳魚(2005(平成17)年級群)、2歳魚(2004(平成16)年級群)、3歳(2003(平成15)年級群)以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道(まき網、定置網)

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年並。1歳魚は好調であった前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。サバ類全体として日向灘、豊後水道は前年を下回るが、薩南海域は前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、28～37cm(1、2歳魚)が主体で、薩南海域では30cm以下(0歳魚)も主体となる。

2. 紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。サバ類全体として前年並からやや上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、28～35cm(1、2歳魚)が主体。マサバは28～36cm(1、2歳魚)が混獲される。

3. 熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は少ない。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回り、3歳以上は少ない。サバ類全体として前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、25～33cm(1歳魚)が主体となる。31～35cm(2歳魚)および期後半からは25cm以下(0歳魚)が混じる。マサバは混獲程度。

4. 伊豆諸島周辺海域(棒受け網、たもすくい)

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は少ない。1歳魚は大きく下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。サバ類全体としては前年並か、やや下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて三宅島周辺が主漁場となる。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、28～34cm(2歳魚)が主体で、24～29cm(1歳魚)および34～37cm(3歳魚)が混じる。8月以降には25cm以下(0歳魚)が混じる。マサバは混獲程度。

5. 犬吠～三陸海域、道東海域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：マサバ0歳魚は前年並の低水準。1歳魚は前年を大きく下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。マサバとしては前年を下回る。ゴマサバ0歳魚は前年同様に少ない。1歳魚は前年を大きく下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。ゴマサバとしては前年を下回る。サバ類全体として前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網は、8月に三陸北部海域で初漁があり、8月下旬には道東海域でも漁場が形成される。9月には三陸北部海域で本格化し、金華山周辺にも漁場が形成される。10月には三陸～常磐海域に漁場が広がる。11月は三陸～犬吠海域となるが、主漁場は常磐以南である。12月には常磐～犬吠海域に漁場が形成され、犬吠海域が主漁場となる。

(3) 魚体：マサバは29～35cm(2歳魚)主体に25～28cm(1歳魚)が混じる。期後半に19～25cm(0歳魚)も漁獲される。ゴマサバは25～34cm(1、2歳魚)が混獲される。期後半に25cm以下(0歳魚)が混獲されるが少ない。

漁況の経過（2006（平成18）年1月～6月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マサバ

コホート解析による資源量計算によると、資源量は1990年以降低い水準にあり、1992年・1996年には卓越した加入があったが未成魚段階で多獲され、産卵親魚量の増加には結びつかなかった。近年の産卵親魚量は増加傾向だが依然低い水準にある。

2003年級群（3歳魚）以上の残存資源量は少ない。2002年級群は比較的加入量水準が高かったが、現在の残存資源量は2千万尾程度である。2001・2003年級群は加入量水準が低い年級であり残存資源尾数は少ない。

2004年級群（2歳魚）は1992年級群（28億尾）に準ずる加入量水準（24億尾）であり、2004年秋から現在まで漁獲の主体をなした。現在の残存資源尾数は3億尾程度で、近年の2歳魚としては1996年級群が2歳であった1998年に次ぐ水準である。

2005年級群（1歳魚）は、2005年5月の黒潮統流域幼魚調査（中央水研・北水研）による加入量指数が比較的高かったことから当初は加入量を9億尾程度と見積もった。しかしその後の調査船調査や漁業における漁獲状況はいずれも悪かった。茨城水試による未成魚越冬群指数は177と、2001、2003年級群を上回るものの低い値となった。これらの結果を総合してコホート解析によって推定された2005年級群の加入尾数は3億尾程度と、2004年級群を大きく下回り、2001、2003年級群並みの低水準と判断される。

2006年級群（0歳魚）は現段階では情報が限られている。2006年5月の黒潮統流域幼魚調査における漁獲尾数、6～7月の黒潮 - 親潮移行域の中層トロール資源調査（東北水研）における分布量がともに著しく少なかったこと、茨城県・千葉県沿岸の定置網や船曳き網などの漁獲状況も前年同様少ないことから、加入量水準は2005年級群並に低い可能性が高い。しかし、前述の調査船調査が5～7月に行われている一方で、マサバの産卵は5～6月にピークがあったことから、両調査は2006年級群の主たる発生群を捉えていない可能性もある。したがって、現段階での2006年級群の評価はきわめて不確実である。

(2) ゴマサバ

コホート解析による資源量計算に基づく各年級群の推定加入尾数は、2002年級群は10億尾、2003年級群は6億尾、2004年級群は18億尾、2005年級群は6億尾であった。若齢である2004、2005年級群の推定値は、コホート解析の特性上不確実性が高いが、2004年級群は近年の卓越年級群である1996年級群（推定加入尾数：17億尾）と同程度に豊度が高く、2005年級群は豊度が低いと推定される。2005年級群は、静岡県水試の棒受網漁業CPUEに基づく加入量指数では0.34であり、2003年級群：33.8、2004年級群：212.4に比べて極めて低く、1995年以降最低であった。これまでの各地漁業での漁獲状況や調査船調査結果をあわせみても豊度は低いと判断される。

2006年級群は、6月までの各地漁業の漁獲状況では、鹿児島県の定置網やまき網での混獲は多いものの、その他の海域では例年に比べて少ないか漁獲されていない。調査船調査では、5月の黒潮統流域幼魚調査（中央水研・北水研）による加入量指数は5であり、2004年：17、2005年：11に比べて極めて低く、1996年以降の同調査で最低であった。6～7月の黒潮 - 親潮移行域の中層トロール資源調査（東北水研）による推定現存量は0.6億尾（サバ類）であり、2004年：200億尾（ゴマサバ）、2005年：9.2億尾（同）と比べて極めて少なく、2001年以降の同調査で最低であった。以上のことから、2006年級群の加入量水準は低いと判断されるが、発生後間もない調査結果に基づく現段階での評価は極めて不確実である。

2. マサバ

(1) 来遊量

資源状態に記したとおり、0歳魚（2006年級群）の加入量水準は、情報が限られており不確実ではあるが、2005年級群並の低水準と考えられる。

1歳魚（2005年級群）の加入量水準は、2001、2003年級群並の低い水準と考えられ、予測期間における関東以北への来遊量は、多かった前年同期を大きく下回ると考えられる。

2歳魚（2004年級群）の残存資源量は、前年同期の2歳魚（2003年級群）より多く、予測期間における関東以北への来遊量は、前年同期を上回ると考えられる。

3歳（2003年級群）以上の残存資源量は少なく、予測期間における来遊量は低水準と考えられる。

以上のことから本予測期間は2004年級群（2歳魚）が主体に2005年級群（1歳魚）が混じり、期後半には2006年級群（0歳魚）も漁獲されることが考えられるが、0歳魚の加入量の見積もりは非常に不確実である。伊豆諸島以西の海域では、サバ類に占める近年のマサバの割合は低く、漁場形成があっても不安定である。

（2）漁期・漁場

常磐から犬吠周辺海域におけるまき網によるサバ類の1～6月の漁獲は81,968トンと、前年同期（105,303トン）を下回った。マサバが約6.9万トン、ゴマサバが約1.3万トンであった。

岩手県・宮城県沿岸の定置網によるサバ類の水揚げは近年多く、2004、2005年は2万トンを超える活況であった。今期も6月にすでに宮城県で3千トンを超す水揚げがあった。

たもすくい・棒受け網漁業（千葉県、神奈川県、静岡県船）の1～6月のマサバ水揚げ量は、静岡県棒受け網で175トン、千葉県・神奈川県たもすくい381トン、合計556トンとなり、前年同期（212トン）を上回った。ここ1～2年増加傾向にあるが、依然として低水準である。漁場は4月下旬から5月中旬まで伊豆諸島北部海域で漁場が形成された。

今期は常磐海域以北では、まき網、定置網での漁獲が中心となる。例年三陸北部海域で8～9月にまき網の初漁となる。今期はすでに魚群は北上しており、三陸沿岸定置網にはまとまった入網がみられていることから、8月には初漁、9月はじめには本格化すると考えられる。漁場の移動は前年と同様の経過をたどり、8月下旬には道東沖でも漁場が形成される。

本予測期間中は、伊豆諸島以西の海域では紀伊水道外域にマサバ漁場が形成されるが低調であり、他の海域ではほとんど期待できない。

（3）魚体

常磐から犬吠周辺海域では、1～3月は28～32cm主体に、26cm以下の個体がわずかに混じった。4月は20～33cmの幅広い組成となり、5月は30～35cm主体、6月は30～35cm主体に30cm以下の個体が混じった。2006年6月までの年齢査定結果や体長組成の推移などから、関東以北における本予測期間の年齢別尾叉長は、1歳魚25～28cm、2歳魚29～35cm、3歳以上は34cm以上であり、期後半に出現する0歳魚は例年の傾向から19～25cmと予測される。年齢査定結果によると各年級群の体長幅は広く重なり合っており、厳密な体長区分は困難である。なお、熊野灘以西の海域での成長はこれよりやや速いと考えられる。

（4）資源管理

マサバの産卵親魚量は増加傾向だが、依然低い水準にある。2004年級群は、近年の卓越年級群である1992、1996年級群に次ぐ高い加入量水準であり、今後この年級群が加わることによる産卵親魚量の増加が期待される。近年の研究によると、2歳魚は産卵に加わるものの産卵開始時期は3歳以上の高年齢より遅く、産卵期間は短い傾向がある。2004年級群による本格的な産卵が期待できるのは2007年の産卵期からと考えられる。続く2005、2006年級群の加入量水準は高くない。現在マサバ太平洋系群の産卵親魚量の回復を目指した資源回復計画が実行されているが、今後も産卵親魚量の増加傾向を維持し、マサバ資源の回復を図るためには、引き続き若齢魚を保護する必要がある。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0歳魚(2006年級群)は、評価の不確実性が高いものの、加入量水準は低いと判断される。1歳魚(2005年級群)は加入量水準が低いと推定され、6月までの漁況では、例年1歳魚が漁獲の主体となる熊野灘以西海域においても漁獲は少なかった。来遊量は、加入豊度の高い前年の1歳魚(2004年級群)と比べることから、前年を大きく下回る。2歳魚(2004年級群)の資源量は依然として高水準と推定され、各地漁業の漁獲物の主体となっており、来遊量は前年を上回る。3歳(2003年級群)以上の残存資源量は少なく、来遊量は少ない。2004年級群に続く年級群の加入豊度は低く、ゴマサバ全体では多くの海域で前年を下回るが、これまでの漁況経過からみて、紀伊水道外域では前年並みからやや上回り、薩南海域では前年を上回る。

(2) 漁期・漁場

6月までの伊豆諸島以西の各海域のゴマサバ漁況は、多くの海域で好調であった前年を上回って推移した。1~6月の漁獲量は、紀伊水道~薩南海域は3.0万トン(前年同期実績2.0万トン)、熊野灘~伊豆諸島周辺海域は2.6万トン(同3.5万トン)であった。

熊野灘以西海域では、主体となる1歳魚(2005年級群)が少ないものの、2歳魚(2004年級群)の資源水準が依然として高く、期を通じて漁場が形成される。

伊豆諸島周辺海域では、主体となる2歳魚(2004年級群)の来遊量が多く、黒潮流路はN型からA型で推移すると予測されており、水温が極端に下がることはないと考えられるので、例年同様、三宅島周辺海域で期を通じて漁場が形成される。

犬吠以北海域では、近年、高水温傾向にあり、ゴマサバ1歳以上が2001年以降は三陸北部まで、2005年は道東海域まで来遊して漁場を形成した。2歳魚としては1999、2000年級群が三陸北部海域で多獲された。今期も資源量水準の高い2歳魚主体に三陸北部~道東海域まで来遊し、マサバに混獲される。

(3) 魚体

体長組成の推移、年齢査定の結果から、今期の年齢別尾叉長は概ね次の通りである。0歳魚(2006年級群):28cm以下、1歳魚(2005年級群):25~33cm、2歳魚(2004年級群):29~35cm、3歳以上(2003年級群以上):34cm以上。伊豆諸島周辺以北海域では、若齢魚の体長はこれよりやや小さい。

熊野灘以西海域は、例年、1歳魚が漁獲の主体になるが、今期は2歳魚の資源水準が高く、漁獲物に占める割合は高い。0歳魚は加入豊度が低いと判断されていることから少ない。伊豆諸島周辺海域および犬吠以北海域では、6月まで資源水準の高い2歳魚が漁獲の主体であり、今期も引き続き漁獲の主体になる。期後半に加入する0歳魚は加入豊度が低いと判断されていることから少ない。

マアジ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2006(平成18)年8月～12月)

対象海域:北薩～室戸岬東部、紀伊水道外域、熊野灘、相模湾

対象漁業:まき網、定置網

対象魚群:0歳魚(2006(平成18)年級群)、1歳魚(2005(平成17)年級群)、2歳(2004(平成16)年級群)以上。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1.北薩～室戸岬東部(まき網、定置網)

(1)来遊量:北薩～薩南では低水準の前年並み。日向灘では低水準の前年並みか前年をやや下回る。豊後水道西部では前年を下回る。豊後水道東部では近年(過去5年)並み。高知県海域では低水準の前年並み。

(2)魚体:19cm以下(0歳魚)が主体。豊後水道では20～24cm(1歳魚)も対象となる。

2.紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1)来遊量:前年を下回る。

(2)魚体:西部では10～14cm(0歳魚)と20～24cm(1歳魚)、東部では19cm以上(1歳以上)が主体。

3.熊野灘(まき網、定置網)

(1)来遊量:中北部では前年を下回る。南部では前年並み。

(2)魚体:8～10月は20～24cm(1歳魚)主体、11～12月は14～18cm(0歳魚)主体。

4.相模湾(定置網)

(1)来遊量:8月の1歳魚は前年並み。9月以降の0歳魚は前年を下回る。全体として前年を下回る。

(2)魚体:8月は20～23cm(1歳魚)と10～13cm(0歳魚)。9月以降は14～19cm(0歳魚)主体。

漁況の経過(2006(平成18)年1月～7月)および見通しについての説明

1.資源状態:

資源量は1986(昭和61)年以降顕著に増大し、1990年代半ばは15万トンから16万トンと高水準であった。しかし1997(平成9)年から減少し、2000(平成12)年から2001(平成13)年にやや増加したものの、2002(平成14)年から再び減少し、2005(平成17)年に10万トンとなり現在は中水準で減少傾向にある。

2.来遊量、漁期・漁場:

2004(平成16)年級群(2歳魚)の1～6月の漁況は、紀伊水道外域では2～3月にまとまって来遊し

た後極めて低調となった。熊野灘では前年を下回り、他の海域にもほとんど来遊していない。残存量は少なく、今漁期の来遊はあまり期待できない。

2005(平成17)年級群(1歳魚)は、例年の経過から、今漁期を通して紀伊水道から熊野灘で、期初めには相模湾でも漁獲の主体となると考えられる。この年級群の0歳魚としての来遊は、紀伊水道外域～熊野灘では前年を大きく上回ったが、北薩～豊後水道では前年を大きく下回り、相模湾でも前年をやや下回った。1歳魚となった今年1～6月の来遊は、北薩～薩南では前年並みで、豊後水道では前年を上回り、紀伊水道外域で前年をやや上回ったが、日向灘、熊野灘では前年を大きく下回り、相模湾では好漁の前年を下回って前年並みであった。熊野灘では1～6月の漁況と7～12月の漁況に正の相関が認められている。なお、一昨年5～6月に相模湾に14～15cmで出現して8月まで漁獲された小型魚は昨年に続いて今年も見られなかった。

2006(平成18)年級群(0歳魚)は、北薩～紀伊水道外域西部では今漁期を通して、熊野灘と相模湾では期後半の漁獲の主体となると考えられる。九州南東沖における表層網による稚魚の採集数と日向灘南部の大型定置網への入網数は前年並みの低水準であった。1～6月の来遊は、6月に豊後水道東部に暖水波及とともにまとまって来遊し、熊野灘南部で前年並みであったほかは、日向灘と熊野灘中北部の定置網への入網が例年より1月遅れて量も少なく、相模湾の定置網への入網が甚だ少なく、他の海域でも極めて低調に推移した。日向灘、相模湾では1～6月の漁況と7～12月の漁況に正の相関が認められ、他の海域でも関係があると考えられる。また、黒潮続流域における表中層トロールによる幼稚魚の採集数は前年を大きく下回った。

予測対象海域では周年漁場が形成される。

2005(平成17)年7～12月の主要港水揚量は鹿児島～高知は10,095トン、徳島と和歌山は1,372トン、三重と愛知は2,229トン、相模湾は716トンであった。2006(平成18)年1～6月は鹿児島～高知は6,138トンで前年同期の0.9倍(ほぼ予測通り)、徳島と和歌山は1,674トンで1.5倍(予測外れ)。三重と愛知は422トンで0.5倍(予測外れ)、相模湾は1,328トンで0.5倍であった(予測外れ)。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2006(平成18)年8月～12月)

対象海域:北薩～道東

対象漁業:まき網、定置網、船曳網

対象魚群:0歳魚(2006(平成18)年級群)、1歳魚(2005(平成17)年級群)、および2歳魚(2004(平成16)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1.北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1)来遊量:依然として低水準。熊野灘の1歳魚は前年を上回る。

(2)漁期・漁場:夏秋季中心に散発的な漁況で推移する。

(3)魚体:熊野灘では18～19cmの1歳魚および13～16cmの0歳魚。その他の海域では12～18cmの0歳魚が主体。

2.伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1)来遊量:依然として低水準。全体として前年並み。

(2)漁期・漁場:伊勢・三河湾では8月。遠州灘～駿河湾では散発的。相模湾では低水準ながら年末まで継続。

(3)魚体:伊勢・三河湾では11～15cmの0歳魚。遠州灘～駿河湾では16～19cmの1歳魚主体。相模湾では0・1歳魚主体。

3.房総～道東(まき網、定置網)

(1)来遊量:漁獲の主体となる1歳魚は低調であった前年を上回る。2歳魚はほとんど漁獲されない。年末の0歳魚はカタクチイワシへの混獲程度。

(2)漁期・漁場:8～9月は房総～鹿島灘と常磐北部～三陸南部。10～11月は三陸南部～常磐南部。11月からは常磐以南が中心となる。12月以降0歳魚が来遊し、犬吠埼周辺でカタクチイワシに混獲される。仙台湾～三陸南部の定置網並びに道東海域への来遊は低調。

(3)魚体:17～19cmの1歳魚主体。12月以降未成魚越冬群として来遊する0歳魚は12～13cm。

漁況の経過(2006(平成18)年4月～6月)および見通しについての説明

1. 資源状態:

マイワシ太平洋系群の資源量は1994(平成6)年に100万トンを下回り、その後1999(平成11)年までは70万～90万トン台で推移したが、その後再び減少傾向となった。2003(平成15)年以降は10万トン台の低水準にあると推定された。また、依然として減少傾向にあると見られる。

2004(平成16)年級群は、2004(平成16)年の間は0歳魚として比較的良好な漁獲加入を見せた海域もあったが、2005(平成17)年の間1歳魚としての漁獲尾数は非常に少なく、加入量水準は当初評価よりも低いと見られた。また同様に2005(平成17)年の間、越冬期末成魚調査(中央水研・東北水研八戸)、沖合域の北辰丸による表層流網調査(釧路水試)、北鳳丸による表中層トロール調査(東北水研八戸)で、1歳魚としての採集がほとんど見られなかったことから、沖合域での分布量も極めて少ないと考えられた。現在2歳魚としての資源量水準は漁獲対象にならないほど低いと考えられる。

2005(平成17)年級群は、2005(平成17)年6～7月の北鳳丸・青海丸による表中層トロール調査(東北水研八戸)では0歳魚として2003(平成15)年級群並みの分布量が認められた。その後9～10月の北鳳丸による表中層トロール調査(東北水研八戸)では、近海での分布が見られず、主に東経160度以東に分布していた。2006(平成18)年2月の俊鷹丸による

越冬期末成魚調査（中央水研・東北水研八戸）においては、沖合に広く分布していたことが示され、その密度も高く（2.82尾/網）、2002年級群（1.39）並びに2003年級群（1.57）をも上回っていた。2006（平成18）年6～7月の北鳳丸・青海丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）では、1歳魚として2004（平成16）年級群の約2倍の分布量が認められた。2006（平成18）年6月からの房総～鹿島灘海域での比較的活発な漁獲の主体となっている。これらのことから、現在1歳魚としての資源量水準は2004（平成16）年級群を上回ると考えられる。

2006（平成18）年産卵期（前年10月から当年6月までの暫定値）における産卵量は約35兆粒であり、近年で最低の2002（平成14）年の産卵期並みであった。また、2005（平成17）年産卵期と異なり、房総以北海域への順調な加入につながると考えられる熊野灘～房総海域での産卵量も極めて低水準（3.1兆粒、2005年産卵量は28.9兆粒）であった。5月の北鳳丸による幼稚魚調査（中央水研）での加入量指数は2.5であり、2001～2004（平成13～16）年は上回ったものの、前年（28）を下回った。2006（平成18）年6～7月に行われた北鳳丸・青海丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）並びに北辰丸による表層流網調査（釧路水試）では、沖合域における0歳魚の分布は認められなかった。これらのことから、現時点では、2006（平成18）年級群の加入量水準は、2005（平成17）年級群を下回ると考えられるが、今後、秋季の表中層トロール調査（東北水研八戸・中央水研）、未成魚越冬群調査（中央水研）等の結果により判断していくことになる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

北薩～熊野灘：前期（4～6月）の主要水揚量は、前年同期を下回り、2002（平成14）年並みの低水準であった。今期（8～12月）も期を通じて、来遊量は低水準であり漁況は散発的に推移すると考えられる。体長組成の推移等から、全体として0・1歳魚主体であったと見られ、その中で熊野灘では1歳魚（14～17cm）が主体、その他の海域では0歳魚（15cm未満）が主体であったと見られる。今期（8～12月）も引き続き、熊野灘では1歳魚（18～19cm）が主体、その他の海域では0歳魚（12～18cm）が主体になると考えられる。

伊勢・三河湾～相模湾：前期（4～6月）の主要水揚量は、前年同期程度の低水準であった。今期（8～12月）も期を通じて、来遊量は低水準と考えられる。体長組成の推移等から、1歳魚（14～16cm）主体で漁獲されたと見られ、0歳魚は少ないと見られる。今期（8～12月）も、遠州灘～駿河湾、相模湾では1歳魚（16～19cm）主体で、これに0歳魚が混じると考えられる。伊勢・三河湾では、かなり低調ではあるが、湾内にいる小型魚が今後漁獲される可能性がある。

房総～道東：前期（4～6月）の主要水揚量は、前年同期を大きく上回った。漁況と、沖合域の分布調査結果も考慮すると、今期（8～12月）の来遊量水準は、極めて低水準で推移した前年同期は上回るものと考えられる。体長組成の推移等から、前期（4～6月）の漁獲の主体は1歳魚（14～16cm）であったと見られる。0歳魚並びに2歳魚が少ないことから、今期（8～12月）も1歳魚（17～19cm）主体で漁獲され、例年通りであれば12月以降0歳魚（12～13cm）がカタクチイワシに混獲されると考えられる。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2006(平成18)年8月～12月）

対象海域：北薩～道東。

対象漁業：まき網、定置網、船曳網。

対象魚群：0歳魚(2006(平成18)年級群)、1歳魚(2005(平成17)年級群)、および2歳魚(2004(平成16)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部のシラス(船曳網)

(1) 来遊量：西薩、志布志湾では前年並みか前年を上回る。日向灘では前年を下回る。豊後水道(佐伯湾)では不漁の前年を上回る。土佐湾では前年並み。伊勢湾、渥美外海～駿河湾では前年を下回り平年並み。相模湾では前年をやや上回る。常磐南部では不漁で前年を下回る。

(2) 漁期：全期間。

2. 北薩～紀伊水道外域西部(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩・薩南海域では好調であった前年並み。日向灘では前年並みか前年をやや上回る。豊後水道南部、土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年並みか前年を上回る。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10cm以下の0歳魚主体。

3. 伊勢湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢湾～相模湾(静岡県側)では前年を下回る。相模湾(神奈川県側)では前年をやや下回る。

(2) 漁期・漁場：伊勢・三河湾、渥美外海、駿河湾では全期間。相模湾は8月中心。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海、相模湾(神奈川県側)は5～10cm(0歳魚)主体に10～13cm(1歳魚)が混じる。駿河湾、相模湾(静岡県側)は10～13cm(1歳魚)主体。

4. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：1そうまき漁場は11月下旬～12月に三陸南部から順次常磐北部、常磐南部、鹿島灘、犬吠埼周辺に形成される。道東のまき網は9～10月。仙台湾～三陸の定置網は全期間。常磐の小あぐり・房総沿岸の2そうまきは全期間。

(3) 魚体：常磐の小あぐり、房総の2そうまきは8～10月上旬で体長10～11cmの1歳魚主体、10～11月は6～9cmの0歳魚主体。11月下旬以降は、1そうまき、常磐の小あぐり、房総の2そうまきとも12cm以上の1歳魚主体。道東のまき網、三陸の定置では12cm前後の1歳魚主体。

漁況の経過(2006(平成18)年4～6月)および見通しについての説明

1. 資源状態 :

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は1998(平成10)年から2005(平成17)年まで80万～150万トンで推移している。水準は過去20年では高位、動向は5年間で横ばい傾向にある。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域から沖合まで広く分布している。

2004(平成16)年級群は、冬春季の浮魚調査(中央水研、東北水研)において過去4年の中で最も推定現存量が少なかったこと、2005年下半期に房総・常磐～道東におけるまき網による漁獲量が前年を大きく下回ったこと等から、近年の中ではかなり低い水準と考えられる。

2005(平成17)年級群に関しては、2005年6～7月の北西太平洋沖合域の表層トロール調査(東北水研)による体長10cm未満の分布量で2004(平成16)年級群を上回った一方で翌2006年6～7月の調査では体長10cm以上の分布量が2001年以降で最低水準であった。しかし2005年の房総沿岸のジャミセグロ漁況が好漁であったこと、2005年9～10月の道東まき網漁獲物、同年9～10月の道東～三陸沖の中層トロール調査(東北水研)でも0歳魚時点で採集されていたことや、房総以北における2006年4～6月の漁況が2001年以降で中程度であったことも考慮に入れると近年の中では中水準であると考えられる。

2006(平成18)年級群は、1～6月の本州太平洋岸における産卵量が4,000兆粒強であり過去3年間の同期の産卵量(7,000～11,000兆粒)を下回り2001年・2002年同期(5,000兆粒強)に近く高水準期の中ではやや少ないこと、西薩・薩南海域を除く太平洋岸の各地においてシラスは前年を下回っているが総じて平年並みの漁況であることから、総合的に見ると現段階では近年の中では中～低水準であると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体 :

(1) 西薩～常磐南部のシラス(船曳網)

今年の春漁(3～5月)が西薩海域、志布志湾海域とも前年・近年(過去5年)を上回り好調だったことから秋漁(9～12月)も前年並みか前年を上回ると考えられる。日向灘では下半期に黒潮が日向灘沖で離岸すると不漁となる傾向があることから、豊漁の前年を下回ると予測される。豊後水道(佐伯湾)では親魚(2005(平成17)年級群)が継続して漁獲されていること、および比較的高い相関のある前年のシラス漁獲量との相関関係から、8～12月の漁獲は前年を上回ると予測される。土佐湾では4～6月で好漁の前年を下回ったが平年(過去10年)を上回った。渥美外海は低水温の影響もあり漁期が例年より1ヶ月以上遅く、6月末までの漁獲量は豊漁だった前年の約半分、平年(過去10年)の7割弱であった。遠州灘から駿河湾では4～6月の産卵量、後期仔魚ともに昨年を下回り、3～6月の水揚量からも前年を下回ると推測される。相模湾では3～6月の漁獲量が前年および近年(過去5年)を下回ったが、卵稚仔の分布調査結果から前年をやや上回ると推測される。常磐南部では黒潮の南偏傾向が持続し10月以降はA型流路を取ると見込まれることから不漁になると予測される。

(2) 北薩～紀伊水道外域西部(まき網、定置網)

北薩及び薩南海域では周辺海域でのバッチ網漁業が好調であることから、好調だった前年並みと考えられる。日向灘では1999年以降3～7月を中心に大羽が多獲されたが、本年は6月現在で前年同様に大型群の来遊が少なく、上半期と下半期の主漁期(7～9月)の漁獲量との相関関係から来遊水準を判断した。豊後水道では4～6月は1歳魚主体で前年を上回る漁獲があったが

春シラス漁が低調であり、8～12月は例年0歳魚が主対象となることから好漁は見込めない。土佐湾では例年8月以降の漁獲はほとんど無いが前年は1984年以降で最も高水準であったため今期は前年を下回る。紀伊水道外域西部では、大阪湾と播磨灘で6月の産卵量が高水準であったことから春季に産卵親魚が紀伊水道から瀬戸内海東部へ多く回遊したと考えられ、この群が秋季以降本海域に再び回遊する可能性を考慮すると前年並みか前年を上回ると推測される。

(3) 伊勢湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

春季の伊勢、三河湾および渥美外海における1歳魚(体長10～12cm)は、1～6月の漁獲量で前年を大きく上回り今後も前年を上回る来遊があると推測されるが、今後の漁獲の主体となる0歳魚(体長5～10cm)はシラスの来遊が1ヶ月以上遅れたこと、6月以降の産卵活性が平年並みと考えられることから、来遊は前年をやや下回ると推測される。総じて同海域では前年を下回る漁獲になると考えられる。駿河湾～相模湾(静岡県側)ではシラス漁が前年より低調であること、1歳魚(2005(平成17)年級群)は4～6月にまき網漁獲量が前年を大幅に下回ったことから前年を下回ると考えられる。相模湾(神奈川県側)では、夏季の漁獲量と太平洋系群の資源量との間に相関があり、資源量の推定値は前年をやや下回った。同海域は、一般に夏季が来遊の中心であるため、前年をやや下回ると推察される。

(4) 房総～道東(まき網、定置網)

2004(平成16)年級群は低水準であるため今後も主たる漁獲対象とはならない。2005(平成17)年級群は2004(平成16)年級群を上回り近年の中でも中水準にあると推定され、北部太平洋区まき網による本年4～6月の漁獲物も1歳魚(2005(平成17)年級群)主体で前年同期の383%、2004年同期の68%の漁獲があった。各年級群の資源状況から、予測期間中も1歳魚主体で前年を上回る漁獲になると推測される。

常磐・房総海域における1そうまきの漁場は、1～2月に常磐南部から犬吠埼海域、3月に鹿島灘から犬吠埼海域、4月に犬吠埼以南、5～6月に鹿島灘から犬吠埼海域にそれぞれ形成された。今後の1そうまきの漁場は、近年の推移から8月以降同海域では形成されず、南下期は11月下旬～12月に三陸南部から順次常磐北部、常磐南部、鹿島灘、犬吠埼周辺に形成されると考えられる。魚体は1歳魚(2005(平成17)年級群)が主体となるが、常磐の小あぐりと房総沿岸の2そうまきでは10～11月に0歳魚が主体となる。魚体サイズは6月現在の漁獲物の体長にその後の成長を加味して推測した。

宮城県における4～6月までの漁獲量は、定置網を主体に7,274トンで前年同期の129%であった。魚体は、4月で10.5～13.5cmの範囲でモードは11.5cm、5月以降で9.5～15.0cmの範囲でモードは11.5～13cmであった。

渡島の定置網では4～6月で漁獲量は956トンであり、前年(918トン)を若干上回ったが胆振では1.0トンであり前年(7.2トン)を下回った。釧路水試が6月27日～7月5日に道東～三陸沖太平洋で北辰丸により実施した流し網による調査では、CPUEは897.9尾/回で前年(697.3尾/回)を上回ったものの1994年以降で中水準であった。同調査における魚体は11～14cm台で12.5cm台が主体であったが前年よりも小型魚が多かった。秋季の漁獲の主体となる2005(平成17)年級群の資源量は2004(平成16)年級群より高い水準にあると推定されるため、夏季以降の道東海域へのカタクチイワシ来遊量は前年を上回ると考えられる。

ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2006(平成18)年8月～12月)

対象海域:北薩～熊野灘

対象漁業:まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群:2006(平成18)年級群及び2005(平成17)年級群。魚体は被鱗体長。

1. 来遊量:北薩～薩南では低調の前年を上回るが近年(過去5年)並みか近年を下回る。日向灘～豊後水道西部では前年を下回る。豊後水道東部では近年(過去5年)を上回る高水準。宿毛湾は高水準の前年並みか前年を下回る。土佐湾は前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年を下回る。紀伊水道外域東部～熊野灘南部では前年、平年(過去10年)を下回る。熊野灘中北部では前年を下回る。
2. 漁期:土佐湾の多鈎釣は11月から。他は全期間。
3. 魚体:6～20cm(前年秋～今年生まれ)が主体。8月までは20～23cm(前年夏まで生まれ)も来遊する。

漁況の経過(2006(平成18)年1月～7月)および見通しについての説明

1.資源状態:

資源量の指標となる産卵量が過去20年で最多であるので、資源水準は高位、動向は最近5年の推移から増加傾向にあると考えられる。

2.来遊量、漁期・漁場:

北薩では今期主体となる0歳魚の来遊が低調であった。日向灘では年間の来遊量の指標となっている1月の漁獲量が前年を下回った。豊後水道西部では今期主体となる0歳魚の来遊が低調で、年後半の漁獲量と比較的高い相関が見られる5～6月の漁獲量が前年を下回った。豊後水道東部では1～6月の水揚げは好漁の前年をやや下回り、平年(過去10年)、近年(過去5年)を上回った。宿毛湾の今期まき網漁獲量と相関のある3～6月の高知県定置網への0歳魚の入網は前年を下回って低調であったが、宿毛湾のまき網の1歳魚漁は近年にない好漁であった。紀伊水道内外域西部では卵採集数が前年を下回り、外域西部の6月までの漁況は低調であった。紀伊水道外域東部～熊野灘南部では黒潮が潮岬沖を接岸基調で推移して来遊条件が良いと予測されるが、今期主体となる0歳魚は棒受網漁が前年、平年(過去10年)を下回ったことから来遊が低調と考えられる。熊野灘中北部では今期主体となる0歳魚の定置網漁が前年を下回った。

2005(平成17)年7～12月の主要港水揚げ量は11,308トンであった。2006(平成18)年1～6月は7,555トンで前年同期の1.7倍であった(予測通り)。